

612) 三春の滝桜

高崎に住むバッチャンと三春の滝桜を見に行くことにした。何でも滝桜を見るのはバッチャンの長年の夢だったという。その日は朝から快晴で、気持ちのいい日になった。バッチャンとは高崎の駅で待ち合わせ、そこからバッチャンのクルマで、北関東自動車道、東北縦貫道を経て、三春へ行くことにした。帰りは付近の桜を見ながら、出来れば白河のお城を見て白河から高速に乗って帰るつもりで、白河までは万事順調だった。ところが白河のお城を見ていたら急に風が吹き始めて、その風は車を揺するほどの風となり、白河の高速道入り口も閉鎖されてしまった。やむなく4号国道を走って宇都宮あたりで、高速道に乗って高崎へ行くつもりで、のんびり走っていると、宇都宮の入り口がなかなか見つからない。もたもたしながらパチンコ屋でトイレを借りて、道を尋ねて、何とか高速に乗った。ところがここからがひどい向かい風で、バッチャンの軽自動車ではなかなかスピードが出ない。時は刻々と過ぎて行くばかりか、ついにガソリンの残量警告ランプが点灯して、どこでガス欠になるか分からなくなった。それでも高崎までは何とかたどり着いて、ガソリンを入れることは出来た。時計を見るともう11時をだいぶ過ぎている。そろそろ我輩の家に帰る電車が危ない。駅まで送ってもらって、バッチャンに「もし5分経っても我輩がもどって来なかったら、帰ってもいいよ」と言い残して我輩は息を切らせて、階段を上って行った。ところが今日はあちこち歩いて桜を見てきたために、途中で足が吊って、階段を上れなくなってしまった。それでも足を引きずって、改札口まで行くと、終電はもう1時間も前になくなっていくという。やむなくまた来た道を足を引きずってバッチャンのクルマを探したが、もう影も形もない。それもそうだろう。あれからもう5分どころか15分も経っている。やむなく近所のホテルを探してフロントへ行くと、今夜は58,000円のスイートだけしか空いていないという。そんな大金を我輩が持っているはずがない。ふと思い出したのは駅には隅っこの方に死角があって、ここには何人かの『段ボール族』がたむろしていた。もうこれしかないだろう。高崎なんて今日始めて来た街である。どこかにもっと安いホテルもあるのだろうが、探していたら夜が明けちゃう。駅の隅っこへ恐る恐る行って見ると、そこは意外と暖かく、スペースにもゆとりがあった。吾輩は低調に頭を下げて、「すみません。今夜一晩ご厄介になります。」という、ヒゲ面の親父がジロッとこっちを見て、言葉もなく頷いた。我輩はほっとしてそこに座り込んだ。しかし30分も経たないうちに腰が痛くなった。そこで、「この辺に段ボールが積んであるところはありませんか？」と先ほどの親父に恐る恐る尋ねてみると、この親父は、小さな段ボールを一枚譲ってくれた。「我輩はおいくらで譲っていただけますか？」と、また小声で尋ねると「金なんていらねーよ。」と口籠って言った。我輩は「ありがとうございます。」と丁重に礼を言って、人生初めての野宿と相成った。その後リュックを枕に思いの他ぐっすり眠ってしまった。翌朝は顔も洗わず初電を目指したのは言うまでもない。